

正宗白鳥

夏目漱石論

夏目漱石論

漱石氏の作もたいていは読んでいる。「坊っちゃん」や「猫」「幻影の盾」等相応に面白く読んだ。作家のほとんどない官大学の人としては珍らしいと思った。しかし以上の作も二度読み返すとさっぱり興味がな。落語家的口調が多くて鼻について不快になる。氏は性格を写す技倆はさらにな。 「坊っちゃん」のごときも、淡泊で気象の強い人間を描こうとして、一の類型的人物を作り上げたのだ。氏は他の作家が千人に一人しかない人

間を写すといつて批難するが、千人中の一人という特別の人物でも實際界に存在すれば描くに足る価値が十分ある。氏の作にはちよつと見てありそうでその実今日の時代に生存していそうでない人物が多い。「坊っちゃん」の中の幫間的画家やその他の人物は類型的人物で、しかも誇張してある。この点はよほど鏡花に似ている。鏡花の作は夢幻的だの詩趣があるだのと言われていたが、予はこのごろ彼れの『婦系図』を読んで、少しも夢幻的でもなく超然的でもなく、その江戸通がりと変挺な一種の人生観が出ていたので、溜まらなく厭になった。彼れは

昔から芸者崇拜通人崇拜学者嫌い女学生嫌い、慈善家嫌いというような浅薄な人生観を持っていて、それから割出して故意に一を崇め、一を貶する筆法で書いている。個人としては芸者が好きであろうが、女学生が厭であるうが、どうしてもよいとして、制作に取り掛った時は「芸者」とか「女学生」とかいう類型的好悪の念に駆られず、個々の人物についてもっと深く観察したらよかろう、漱石氏はさすがに学殖があるだけ、鏡花ほど浅薄でもないが、その人生に対する考は一種の道学先生である、「野分」や「二百十日」を見れば常識的道德小説の臭いが漲

っている。氏はイブセンなどに比ぶれば、「退のき場所を
持っているだけえらい」と悟ったふうな口を利いていた
けれど、吾人にはそう信じられぬ。氏の作を見ると、氏
は与えられた道德にきよくせき跼蹐してゐる人で、今の家庭小説家
と多く異なるところがない。もしも氏がそのみずからい
うごとく禅的態度で、真に世上紛々のこと、老病死苦に
超越してるのなら、何で「野分」等の娑婆臭いものが書
けよう。要するに氏は超越したつもりなのだ。吾人も現
実に苦んでるよりは、できることなら超越したいが、生
きてる間はできぬ相談だ。超越してると思つてゐる時は、

それは己を欺いてるので、現実接触到ればすぐ壊れてしまう。

同じ俳人でも戸川残花氏のごときは多少現実を離れて「退き場所」を持っている。少くも超越的分子においては漱石氏と段違いだ。「露とくくく試みに浮世すすがばや」の滋味を多少理解している。「浮世三分五厘」の域に住んでいる。夏目氏はここまで達していない。だから第二義道徳の境にうろろして「坊っちゃん」をして、そのいわゆる俗物を罵倒せしめ、「野分」や「二百十日」において岩崎などを気にしている。しかしまだ悟れない

から小説も書けるんだらう。終に言う氏の従来の作中では、「幻の盾」「猫」等が佳作で、評判の「草枕」は部分部分に佳いところもあるが、全体として感心せぬ。

(明治四十一年三月、「中央公論」)

日本文学電子図書館

夏目漱石論

著者 正宗白鳥
制作者 宮澤一郎
底本 「漱石全集 別巻」角川書店
昭和42年10月10日5版発行

日本文学電子図書館